

明石の史跡（11）足利尊氏と大蔵谷



足利尊氏は、後醍醐天皇と覇権を争った建武3年（1336）に、再度にわたって、大蔵谷に駒を繋いでいる。

1月27日、新田義貞と賀茂河原において、終日戦うも打ち負けて、桂川に退く。翌2828日、神楽岡を舞台に、義貞と相対するも、勝利の女神は微笑まなかつた。1日おいた30日の夜半より、糺河原での戦闘は、激闘するも敗北にいたり、夕刻、丹波の篠村に落ちていった。再起を期して兵庫を目指した尊氏は、2月2日には、三草山（加東郡）から稲美野を通り、大蔵谷に到着している（梅松論）。

世中さはかしく侍ける比、みくさの山をとおりて、大くら谷といふところにて、

前大納言尊氏

今むかふかたはあかしの浦なからまた晴やらぬわか思ひかな（風雅集9）

前途に不安を抱えた、尊氏の心境が、よくあらわされている。

翌3日兵庫に姿を現した尊氏。再起をはかるも、西宮・打出浜・豊島河原の合戦に破れ、12日の戌刻（午後8時）に兵庫を出帆。鎮西に下る。

それから100日余を経過した5月24日の暮、大船団を率いる尊氏の御座船が、大蔵谷に停泊した。陸上部隊は、塩屋より稲美野まで展開する（梅松論）。湊川合戦という大一番を翌日に控えた尊氏。余裕をもっての大蔵谷入りであったろう。

この日、楠木正成は兵700余を率いて、会下山に布陣。その夜、和田岬の新田義貞の陣を訪ねた正成は、酒を酌み交わしながら、過ごしている（太平記）。義貞の援軍を命じられた正成は、尼崎まで来たときに、足利の大軍の情報を得たであろう。勝敗の帰趨は明白であった。

